

まぼろしの鉄道

～ 東北鉄道と明治の福井 ～

●主 催 福井市立郷土歴史博物館
●会 場 1階 松平家史料展示室
●会 期 令和5年7月27日(木)
～ 9月3日(日)

維新後、富国強兵・殖産興業をスローガンとする明治新政府は、その象徴として鉄道の建設を推し進めました。福井には、明治14年(1881)に敦賀駅が、同29年には福井駅が開業しています。この路線は、のちに小松へと延伸して「北陸線」と改称され、北陸地方の人々の暮らしに大きな変化をもたらしました。

しかし、明治期の北陸地方には、実現をみなかったもう一つの鉄道計画がありました。それが、三重県四日市から福井・金沢・富山を経由して新潟へと至る民営「東北鉄道」です。明治14年8月に旧加賀藩主前田利嗣や旧福井藩主松平慶永(春嶽)など北陸地方を治めていたかつての領主たちが「東北鉄道会社」を立ち上げ、県庁や旧藩士たちも協力するなど、実現に大きな期待が寄せられた構想でした。近年、東北鉄道会社の内部資料が発見され、松平家をはじめとした福井側の動きが分かるようになりました。

本展では、当館に新しく収蔵された東北鉄道会社に関する資料を中心に、鉄道の建設に情熱を燃やした福井の人々の姿を紹介します。

東北鉄道会社の路線計画図

【参考文献】 小谷正典『明治日本と鉄道—近代的鉄道政策の形成—』(晃洋書房、2020年)
『工部省記録 鉄道之部 巻23-26』(日本国有鉄道、1977年)
「東北鉄道会社創立要件記録」(越葵文庫、当館保管)

- 請願前に廃案となった計画線
- 明治14年8月請願時の計画線
- 明治16年3月再願時の計画線
- 明治17年4月開通の官設線



第1章 鉄道との出会い

鉄道の存在は、海外情報を記した書物により幕末の日本では広く知られていました。適塾で学ぶなど蘭学に造詣が深い福井藩士・橋本左内や、熊本藩儒でのちに福井藩の政治顧問となる横井小楠は、自らの著作の中で鉄道に言及しています。彼らは、鉄道を西洋科学技術の象徴として憧れのまなざしを向ける一方、鉄道が富国強兵の重要手段であることを理解していました。

この鉄道を、福井ゆかりの人物としていち早く体験したのが、16代福井藩主松平慶永（春嶽）でした。明治5年（1872）9月12日、新橋～横浜間の鉄道開通を祝う開業式が明治天皇臨席の下で行われます。この式には、天皇の相談役にあたる「麝香間祇候」の地位にあった慶永も出席し、新橋～横浜間を往復したお召し列車に同乗しています。また、慶永は明治10年の京都駅開業式にも天皇の随員として参加し、大阪衛戍病院視察のため京都～大阪間を鉄道で往復するなど、鉄道の利便性を実感しています。さらに、慶永の自筆日記「礫川文藻」には新橋～横浜間の鉄道時刻表を綴りこむなど、慶永が鉄道の存在を身近に感じていた様子が分かります。



東京汐留鉄道館蒸気車待合之図（三代歌川広重筆、石川県立美術館蔵）



東京汐留鉄道御開業祭礼図（三代歌川広重筆、石川県立美術館蔵）

第2章 東北鉄道会社の創立と華族

日本の鉄道敷設は明治政府の主導で始まりますが、明治10年（1877）の西南戦争や、明治14年の松方デフレによる不景気で、厳しい財政を強いられることになります。そこで、民間資金による鉄道敷設が進められることになり、その担い手として期待されたのが特権階級にして旧領に影響力を持つかつての領主たちでした。

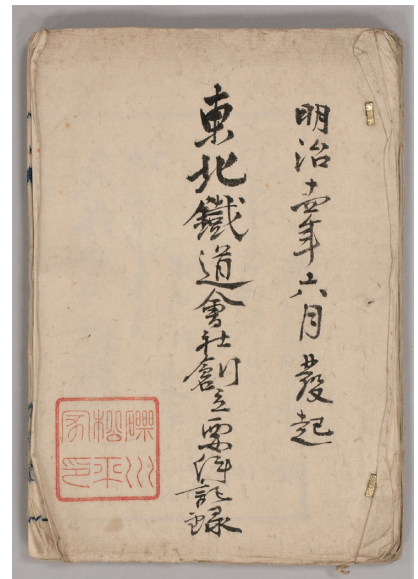
明治14年8月、越前・加賀・能登・越中の旧領主たちと東・西本願寺の両法主が発起人に名を連ねる「東北鉄道会社」の創立願が政府に提出されます。鉄道敷設の工事計画は大きく三期に分けられ、最初の一期は近江柳ヶ瀬～越中富山、次の二期は近江長浜～伊勢四日市と越中富山～越後柏崎、そして最後の三期に越後柏崎～越後新潟、という順番とされ、株金募集の進捗によっては七尾港への支線建設や、長浜～四日市の敷設を一期に繰り上げることも計画されていました。この計画が実現すれば、政府が敷設を進めていた長浜～敦賀の路線と接続し、日本海側の開港地である新潟から太平洋側の要港である四日市までを斜めに縦断する幹線鉄道となっていたでしょう。松平慶永は、越前の人々に向けて演説書を執筆し、東北鉄道により東京・京都・大阪と越前との旅客・運輸の便が向上し、大きな経済効果が期待できると強調しています。

第3章 旧藩社会と東北鉄道

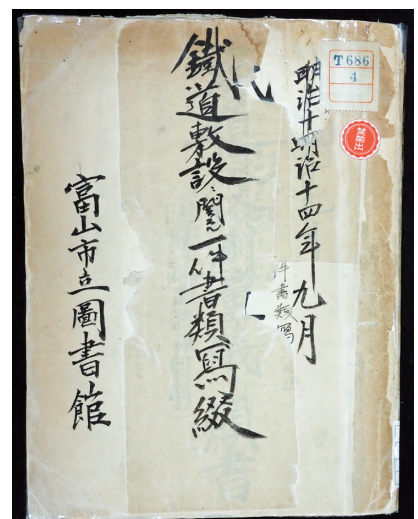
東北鉄道会社の創立時、発起人たちは計48万6千円（現代だと約24億円）を出資しました。しかし、目標とする資本金450万円（現代だと約218億円）には大きく不足しており、越前・加賀・能登・越中の人々から出資金を募ることになりました。越前国内の取りまとめは松平家が、加賀・能登・越中の取りまとめは前田家にあたることになり、東京や各県地に居住する旧藩士たちが創立委員に任命されて事務を担当しました。旧藩士たちと旧領主はかつての君臣関係に基づく連帯意識、いわゆる「旧誼」によって強く結ばれており、旧藩社会と呼ばれる特有の社会を形成していました。先述した松平慶永の演説書では、この事業を士族授産（困窮する士族への救済）の一環と位置づけており、旧藩社会への還元を強く意識していました。また、東北鉄道創立委員の一人である旧富山藩士族の近藤光美は、飛騨国へ赴いて高山・古川・舟津（船津）で勧誘を行うなど、沿線以外の地域にも東北鉄道への関心は広がっていました。

しかし、政府に提出した東北鉄道の創立願は政府内で審議が膠着し、鉄道局長井上勝から坂井港（三国）～福井～金沢～伏木港～富山に敷設を縮小すべきとする意見書が出されました。これを受け、越前の旧領主たちは発起人からの離脱を決定します。その後、東北鉄道会社は鉄道局の意見を受け入れて明治16年8月に再願を行います。翌17年4月に株金募集を中止し、東北鉄道の構想は実現されずに終わってしまうのです。

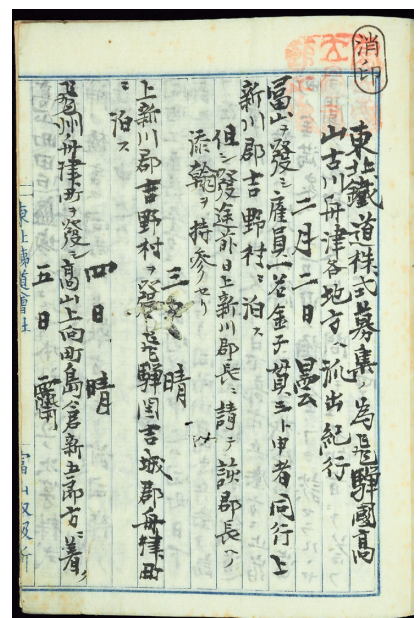
東北鉄道株式募集ノ為飛騨国高山古川舟津各地方へ派出紀行
(部分) (富山県立図書館蔵)



東北鉄道会社創立要件記録
(越葵文庫、当館保管)



鉄道敷設二関スル一件書類
写綴 (富山県立図書館蔵)



松平慶永と鉄道―その福井へのまなざし―

愛知学院大学 久保 正明

日本の鉄道の創業は明治5年9月12日（1872年10月14日）にまでさかのぼることができますが、それからほどなく華族も鉄道とかかわるようになります。同年10月、旧阿波徳島藩主蜂須賀茂韶が華族有志とともに広く士族の有力者も集めて鉄道事業に乗り出すことを願い出ており、これを受けた旧尾張名古屋藩主の徳川慶勝ら10名の華族が翌年3月に同様の願書を太政官に提出しています。そして慶永（春嶽）の名もその中に見ることができます。

慶永は旧伊予宇和島藩主伊達宗城とともに実業家渋沢栄一に鉄道事業の斡旋を依頼し、その結果、東京鉄道組合が成立しました。しかし、この組合は右大臣岩倉具視の主導により華族の資金を集めて銀行（第十五国立銀行）を設立し、それを利用して鉄道を敷設するという計画が一方で持ち上がり、組合に加入していた華族の多くが資金繰りに行き詰まった結果、明治11年に解散の憂き目を見ることになります。他方、岩倉の計画は明治14年に日本最初の私鉄会社である日本鉄道会社の設立に結実していきました。

慶永も日本鉄道会社の出資者となります。そして、それと併せて四日市から長浜を通り福井・金沢を経て新潟へと至る鉄道敷設を目指す東北鉄道会社の設立を旧加賀金沢藩主家前田家とともに主導していきます。この計画も岩倉の肝煎りでした。

計画を進めるにあたって慶永や越前および加賀・越中・能登の旧藩主らは「旧誼」に基づく旧領との関係を強調していました。中でも慶永は旧領民を勧奨して旧領の運搬を便利にし、その富有に力を尽くすことは旧藩主の義務であるとの考えを示し、旧藩主―旧藩士・旧領民という関係を軸に、県庁をも巻き込んで株主の募集に努め、明治15年4月末にその額は100万円（前田家は200万円）に達しました。しかし、事態は一向に進捗せず、慶永らは当時「参謀人」として知られていた土佐出身の後藤象二郎に内情の探索を依頼、後藤の命を受けて後藤と同郷の岡本健三郎が探りを入れたところ、参議井上馨の強い反対により膠着状態が続いていることを知ることになります。そこで井上の説得に努める一方、再三にわたって岩倉に会社設立の認可を求めますが、岩倉は言を左右にして明言を避け続けました。その間、福井で株主募集に奔走していた旧福井藩士10名が上京して、直接慶永らに会社設立の認可を促す意見書を提出し、慶永らは窮地に追い込まれます。

結局、東北鉄道会社の設立認可については、福井から坂井港（三国）を経て金沢へ至り、越中伏木に達する区間から着手することが条件として付されました。しかし、これは越前南部の山岳地帯を越えて太平洋側に出るという慶永らの期待に添うものではありませんでした。そのため慶永らは明治16年3月に除名の上申書を提出、事業から離脱することになります。一方、残された前田家等は改めて会社の設立を出願しましたが、資金繰りに行き詰まり、ついに断念を余儀なくされました。こうして東北鉄道会社は日の目を見ることなく、まさに「まぼろし」となってしまったのです。

次回の展示

松平家史料展示室 企画展「ふくいの伝説」

令和5年9月7日（木）～10月15日（日）

展示解説シート No.161

令和5年7月27日発行

福井市立郷土歴史博物館

〒910-0004 福井市宝永3丁目12-1

電話 (0776) 21-0489 FAX (0776) 21-1489

担当 山田 裕輝

印刷 徳宮本印刷